33

古代インドの病理論書『マーダヴァ・ニダーナ』について

山下　勤

一　序

紀元後八世紀頃のインドで、マーダヴァ（もしくはマーダヴァカラ）という人物によって『ローガ・ヴィニシュチャヤ』（病気の診断）という書物が著された。この書物は、『チャラカ・サンヒター』、『スシュルタ・サンヒター』、『アシュターンガ・フリダヤ・サンヒター』など、古代インドの医学「アーユルヴェーダ」の代表的な文献から、臨床治療の上で特に重要な疾病・症候の原因と病理についての記述を抜粋し、疾病・症候ごとにそれぞれ章を立てて配列し、再編集したものである。また、他の医学書からの引用だけではなく、著者自身によるものと考えられる独自の見解も散見され、これ以前の医学書では扱われたことのない病名も見られる。同書は、その内容の確かさと、それまでになかった参照に便利な編集方法によって、多くの臨床医の間で好評を得、盛んに用いられたようである。後には作者の名を冠して『マーダヴァ・ニダーナ』（マーダヴァによる病理論）という名で呼ばれるようになり、インド医学の古典の一つとみなされることとなった。またここで用いられた疾病・症候の分類法は、インド医学における疾病分類の一つの基準とされ、後の医学書の多くがこの分類を採用するところとなった。

二　『マーダヴァ・ニダーナ』の内容

同書は約千五百三十のサンスクリットの韻文から成り、六十九の章に分けられている。第一章は、病気の診断の際に重視すべき五つの項目（①病因、②前駆症状、③症状、④試験的治療の結果、⑤病気の発現の仕方）についての概論的な章である。第二章から第六十九章までは疾病・症候についての各論である。このうち第二～一九・二十二～三十七・四十九～五十四章ではいわゆる内科的な疾患、第二十、二十一章では魔物（ブフータ）に取り憑かれたために生じるとされる疾患、第三十八～四十八・五十五章ではいわゆる外科的な疾患・外傷、第五十六～六

十章では頚部から上の部位の局所的な疾患、第六十一～六十八章では産科・小児科的な疾患、第六十九章では毒物による疾患・中毒が扱われている。またこの他に、補遺として後代に数章が付加されたことが知られている。『マーダヴァ・ニダーナ』で扱われている疾病と症候は、インド医学の八分科（①身体治療、②局所外科、③一般外科、④解毒法、⑤魔物学、⑥産科・小児科、⑦長生法、⑧強精法）のうち、長生法と強精法を除く六分科の対象とされるものをほぼ全て網羅している。

三　注釈文献

『マーダヴァ・ニダーナ』に対して、後に多くの注釈文献が著された。このうち特に重要で、最も古い注釈は、十二世紀頃のヴィジャヤラクシタとその弟子シュリーカンタダッタによる『マドゥ・コーシャ』である。この書は、それ以前に現れたインド医学書と注釈書、さらにはインド哲学書等をも引用しつつ、ともすれば簡潔に過ぎる『マーダヴァ・ニダーナ』の各韻文の内容について様々な角度から詳細に注を施している。

四　結

『マーダヴァ・ニダーナ』とその注釈文献『マドゥ・コーシャ』に引用されたテキストのうちには、現在では書名だけが知られ、その内容は既に失われてしまったものも少なくない。この意味からも両書は、インド医学史を研究する上で極めて重要な資料であると言えるであろう。これらの内容を合わせて詳細に検討することによって、インド医学の疾病分類と病理論の歴史的な展開の一端を読み取ることができるかも知れない。

（京都学園大学）